

縄文時代中期の集落と 廃棄について

南関東の中期前半～後半を中心に

Colonies and Disposal in the Middle Jomon Period :
Mainly in the First Half to the Second Half of the Middle Jomon Period
in South Kanto

中山真治

NAKAYAMA Shinji

はじめに

- ①縄文時代中期前半の竪穴と廃棄
- ②中期初頭から中期前半初頭の廃棄
- ③中期前半新道期(6期)から藤内Ⅱ期(8期)の廃棄⁽¹⁾
- ④中期中葉(井戸尻期)から中期後半の廃棄
- ⑤「吹上パターン」と呼称されてきた廃棄の土器組成について

⑥まとめ

おわりに

【論文要旨】

南関東の縄文時代中期の廃絶竪穴には土器をはじめ多量の遺物が遺棄されている。日常生活で生じる生活残滓の処理に廃絶した竪穴を好んで廃棄場所として有効に利用していた。縄文時代中期の廃棄について、主として東京多摩地域の中期遺跡での土器の接合関係から読み取れる遺物の廃棄について時期的な特徴と変遷を捉えた。

中期初頭では斜面廃棄が主体的に行われるが、廃棄場所は集落中央の空地「広場」を挟んで対向する2か所に設置された。中期前半以降は竪穴の構築が増加するにつれは廃絶した竪穴の凹地への廃棄が活発になる。中期前半では住居と集落中央「広場」を挟んだ距離を隔てた反対側の廃絶竪穴などに意識的に廃棄されることがある。その際1個体の土器を意識的に分割して投棄することも行われた。中期中葉では遺構外の廃棄場いわゆる「土器捨て場」が設けられた集落が登場する。中期中葉から後半では比較的居住場所から至近の位置にある廃絶竪穴の凹地に廃棄されることが多いが、炉体、埋壘など土器の転用加工なども関連すると考えた。

いわゆる「吹上パターン」と呼ばれてきた半完形土器が纏まった遺存状況については、とくに中期前半ではいずれの竪穴でも15～20点ほどの類似した土器のタイプ(器種)構成となっており、これが当時の一単位のセットとしてこの土器の一括性(同時廃棄)を保証しているものと考えた。ただし廃絶竪穴に遺存する個体は半完形のみではなく多量の破片、石器、礫などを含むため本来は日常の廃棄場として機能していたと考えた。

【キーワード】 廃棄、廃絶竪穴、接合、吹上パターン